

## 中央大学特定課題研究費 一研究報告書一

所属	文 学 部	身分	教授
氏名	平川 眞規子		
NAME	Hirakawa, Makiko		

## 1. 研究課題

（和文） 第二言語の言語知識とその変化に関する研究

（英文） Research on Linguistic Knowledge and its Development in a Second Language

## 2. 研究期間

2年間（2018・2019年度）

## 3. 研究の概要（背景・目的・研究計画・内容および成果 和文 600字程度、英文 50word程度）

（和文）

本研究の目的は、第二言語としての英語の言語知識、特にテンス・アスペクトに関する学習者の意味解釈について、教室等における指導により、どのように変化していくのか、実証的に調べることである。研究背景として、二言語習得研究分野では、明示的な指導や学習が学習者の言語知識に与える影響に関する様々な議論がある。例えば、明示的な指導や意識的な学習により得られた知識は、学習者の暗示的・無意識的な言語知識へと変化することはないとする見解（Krashen, 1977; Schwartz, 1993; VanPattern, 2003, 2016）から、変化することは可能とする見解（Lindseth, 2016）がある。私は、これまでに日本語を母語とする中級英語学習者を対象に、動詞の項構造と形容詞の語順に関する知識の変化について、紙面による文法性判断法や音声による二者択一法などを用いて調査してきた。母語の文法の転移により、誤りが多く観察されたが、明示的な指導を行うことにより、学習者の文法知識がより正確になることが示された。そこで、本研究では、Gabriele & Canales (2011)を発展させ、介入研究（intervention studies）として実験を行った。

実験では、動詞の単純形と進行形（例えば *Mary plays/is playing tennis.*における *-s*, *-ing*）の基本的意味と拡張された意味に注目し、学習者の言語知識とその変化を調べた。その結果、事前・事後の実験（時間制限下における容認度判断タスク）結果に明示的指導の効果は見られなかった。特に、日本人学習者は拡張された意味（進行形と単純形が近未来を表す場合 *Mary leaves/is leaving next week.*）を容認することが困難であった。本研究の成果は、第二言語の形式（形態）と意味のインターフェイスにおける困難さを示していると分析される。

（英文）

The research investigates whether Japanese-speaking learners can acquire the extended range of meanings associated with the simple present and present progressive in English. The results of pre- and post-experiments show that learners fail to accept these extended meanings, suggesting that their acquisition is not facilitated by the explicit instruction in classroom.